

運命と、巡りあわせのシェイクスピア

神羽 登

それほど広くもない我が家の二つの本棚には、もともと関心が高かったイタリア史、西洋中世史の本、ライトノベルをきっかけに嵌っていったハヤカワ文庫や創元ミステリーなどの海外文学、そして仕事で必要となった「本の本」たちが、所狭しと並んでいます。もう一つの本棚には妻が収集しているデザインの本、ウンベルト・エーコや演劇に関する書籍があります。その棚の一段分を占める水色の布クロスに金字の装丁を見るとうっとりとしてしまいます。昭和9年に中央公論社から刊行された坪内逍遙譯『新修シェイクスピア全集』です。全20巻40冊で刊行されたこの全集は、古本としてはそれほど価値もなく、完本で売りに出たとしても三千元もすれば良い方でしょうか。

本を扱う仕事をしていましたと新刊書店、古本屋で出会った本だけでなく、研究者からの頂き物や、図書館での思わぬ放出品が目前に現れることも多くあります。この全集もそのうちのひとつで、ある大学図書館から放出されたものでした。美しい天金でずらっと並べられていたこの全集に魅かれるものを感じ取りました。坪内らがシェイクスピアを翻訳していた雑誌『歌舞伎』を弊社で複製していたこともあり、これも何かの縁かと思ひ我が家に持ち帰りました。

『シェイクスピアアナーナ』という雑誌もあります。かつて、玉泉八州男先生を中心として丸善株式会社から出されていたもので、高宮利行先生、高山宏先生といった現在では学術業界の重鎮でいらっしゃる方々が寄稿されています。我が家の本棚では先ほどの『新修シェイクスピア全集』の下の段に入っています。故郷での同窓会の帰り道、ほろ酔いの私は、ひょいっと覗いてみた古本屋の100円均一コーナーに全10号のうち創刊号と6号を除いた8冊が並んでいるのを見つけました。シェイクスピア好きな妻への手土産にと、この雑誌を我が家に連れて帰りました。久しぶりにパラパラと頁をめくっていますと5号の論文に「坪内逍遙とシェイクスピア」とあり、そういえばこの論文にビビッと

きて購入を思い立ったのだと思ひました。

それから年の瀬となり、書店の先輩から引き継いだあるお客様からの古書探索依頼を見直そうと海外古書店から送られてきた稀覯書のカatalogを見ていた時のことです。ニコラス・ロウによる全集の初版が、とある古書店のカatalogに掲載されていました。シェイクスピアの稀覯書といえますとファースト・フォリオに代表されるフォリオ版を思い浮かべる方が多いでしょうか。全集としてその次に重要なものに、18世紀に出版された4つの全集がありますが、なかでも最初に刊行され、以降のシェイクスピア受容に影響を与えた書籍がこのロウ編の全集です。この本はお客様が長年探されていた書籍で、10年近く古書市場に出てこなかった本でした。この全集、以前に見つけた際には完本ではなく、一部に二版が混ざっていたものだったということ先輩から聞いておりましたので、念のために海外から取り寄せて中身を詳細に確認したところまちがいがなく初版であった時にはホッとしました。数年前に亡くなった南米のギリシャ悲劇研究者の蔵書であったこの書籍は、今ではとある大学の図書館に収まっています。

以上のシェイクスピアを巡る出来事は、2014年のたった三カ月間に起きたことでした。それから一年ほどがたち、今度は国内でも有数のシェイクスピアコレクションをお持ちの京都外国語大学付属図書館の営業担当となりました。そこにはシェイクスピアが繋いでくれた縁を感じざるを得ません。

その2014年はシェイクスピア生誕450周年の年でした。今年2016年は彼の没後400年にあたる記念の年であり、現代化されたシェイクスピア演劇公演等のイベントも多く開催されます。このような年に皆様にもシェイクスピアと、そして彼の作品との良い御縁がありますようにと願って、筆を擱かせていただきます。

じんば のぼる(株式会社 雄松堂書店)